

明日、  
きこみのいない  
朝が来る

いぬじゆん／著  
U35 / イラスト

## プロローグ

「じゃあね、おばさん」

リュウという名の少年は、私にそう言った。

もちろん私がそう呼ばれてもおかしくない年齢だったなら、百歩譲って納得したかもしれない。

だけど私、森崎苗乃は中学二年生。いくらなんでもそんなふうには呼ばれる覚えはない。

怒りのままにリュウをにらむと、彼はもうそこにはいなかった。まるで煙のように消えてしまっていたのだ。

誰もいない空間を見つめて固まる私。

こんな意味のわからない状況になったのは、今から一時間ほど前の話。

学校に忘れ物を取りに戻ったため、帰りが遅くなった私が、急いで公園の横を通り過ぎようとしたのが物語のはじまりだった。

あ  
の  
と  
き  
リ  
ユ  
ウ  
と  
出  
逢  
わ  
な  
け  
れ  
ば、  
私  
の  
人  
生  
は  
変  
わ  
っ  
て  
い  
た  
の  
か  
も  
し  
れ  
な  
い  
—。

# 目次

プロローグ

002

第一章

黒い落とし物

006

第二章

白色のきみの名前

045

第三章

悲しみは黄金色

068



第四章 蛍のように青く光る

120

第五章 夕焼けオレンジに照らされて

141

第六章 透明という色

168

エピローグ

198

第一章——黒い落とし物

公園の入り口で足を止めたのには、理由があつた。

いつもより遅い学校からの帰り道。

高台にある『夕焼け公園』の向こう側に見えるはずの夕陽も、すっかり落ちてしまっている。夕暮れと夜の間の短い時間。

ブランコの隣に立っている丸い電灯が、夕陽の代わりにオレンジに灯っていた。

「まいったな」

宿題に必要な教科書を忘れ学校まで取りに戻ったら、先生に用事を頼まれてしまうという悲劇。

早く家に帰りたいのに思わず足を止めたのは、電灯に照らされたブランコが揺れているように見えたから。

時刻はもうすぐ夜の七時になろうというころ。



秋あきになってあたりが暗くくなるのも日ひごとに早はやくなっている。

こんな時間じかんに公園こうえんにいるなんて、ひよつとしたら不良ふりょうと呼ばれる人ひとたちかもしれない。怖こわい気き持もちはあるけれど、なぜかプランコから目めが離はなせなかった。

目をこらすと、揺れているブランコに誰かが乗っているみたい。

放っておけばいいのに、私の足は公園の砂利を踏みしめていた。

近づいていくと、ブランコに乗っているのは小さな男の子だとわかった。

腕で目のあたりを何度もこすっていて、鼻をすする音も聞こえる。

……泣いている？

男の子は、幼い顔の眉をぎゅつと寄せて唇をかみしめている。

私も一応中学二年生だし、このまま見知らぬ顔はできない。

ブランコの手すりの前まで進んでから、

「どうかしたの？」

そう尋ねるけれど、男の子に反応はななくうつむいたまま。

聞こえなかったのかな。

すう、と息を吸ってから今度はもう少し大きな声を出す。

「迷子になったのかな？」

すると、男の子はようやく私に気づいた様子でゆるゆると視線を合わせてくれた。

怖がらせてはいけない、とにつこりと笑ってみせるけれど頬のあたりがこわばってしまってい



るのが自分でもわかる。

泣き顔だった男の子の表情が変わったのはそのとき。いぶかしげに眉をひそめ、少し首をかしげている。

なんだか幽霊にでも会ったかのように不思議そうな顔をした彼は、ようやく口を開いた。

「あんた、誰？」と。

「え……あんた？」

「お前は誰だと聞いている」

「お、お前!?! あの……も、森崎……苗乃です」

小学生らしからぬ大人びた口調に、素直に自己紹介をしてしまう私。

おそらく『お前』なんて人から言われたのは初めてのこともかもしれない。

普段なら怒ってしまうシチュエーションでも、思考がついていかずに固まっているだけ。

そんな私に、男の子は興味がなさそうに顔をパイとそらしたかと思ったら、

「かまわないでくれ」

と、横顔で言った。

もちろんそうしたいのは私も同じだけれど……。

「もう夜だよ。お母さんも心配してるだろうし」

見ると男の子は、子ども用の真っ黒なスーツを着ていた。

ワイシャツの首元には黒いネクタイものぞいている。

お葬式に参列した帰りに迷子になったのかもしれない。

でも、このあたりに葬儀場はないし、思い当たるのはずいぶん離れた隣町くらい。

「困ったな……」

思わずつぶやくと、男の子は私を横目で見た。

「なぜ苗乃が困るんだ？」

げ、呼び捨て……。

さすがにムカツとした私に、彼はクスクスと笑うから調子が狂う。

「困っているのは僕のほう。苗乃は帰ればいい」

口を開けば子ども相手に怒ってしまったようで、黙ることを選択した自分をほめてあげたい。

しばらく無言の時間が続いた。

「でも……困っているんでしょう？」

やがておそろおそろ尋ねる私に、男の子はあいまいにうなずいた。

「この土地は初めて来たから」

「やっぱり迷子になっちゃったんだ。」

「じゃあ私が家まで送っていくよ」

「苗乃が？」

男の子はまだ迷っている様子だったが、やがて音もなく地面に降り立つと、手を両方の腰に当てた。

「しょうがない。それじゃあ道案内をさせてやるよ」

「させてやる……」

つぶやく私を気にした様子もなく、そばまできて私を見あげる幼い顔。

「苗乃は変わった人間だな」

「は？」

「言っておくけど僕は泣いていたわけじゃな



い。ちよつと休憩してただけだ」

その言葉に思わず笑ってしまいそうになる。

エラそうなことを言っても、やっぱり小学生。涙のあとが頬に残っていることは内緒にして

おこう。

改めて見ると、あどけない表情の男の子はおそらく小学一年生くらい。負けん気の強い年ごろなのかもしれない。

目にかかるほど伸びた前髪に、丸い目のかわいらしい顔をしている。

「家の住所はわかるの？」

「三丁目十四番地の二つとこだ。さあ、行こう」

そう言うと、スタスタと歩いていこうとするので、

「あ、待つて」

男の子を呼び止めた。

「これで調べるから」

誕生日に買ってもらったばかりのスマホから地図のアプリを呼び出し、検索をすることにした。

アプリを起動する間にさりげなく男の子を改めて観察すると、スーツの胸ポケットからなにか

黒い紙がのぞいている以外、持ち物はなさそう。

家の場所さえわかればあとは親に引き合わせればいいし、なんなら交番に連れていってでもいい。とにかくさつさと送り届けて家に帰らなくちや。

「まだか」

鼻から息を吐いてせかす男の子に言われて、いそいで住所を入力する。

私の家が一丁目だから、そんなに離れてはいないはず。

たしか、友達の紗枝の家が三丁目じゃなかったっけ……。

「あ、わかった。こつちだよ」

歩き出す私に、「やれやれ」なんてついてくる。

これじゃあどつちが道案内しているのかわからないよ。

「何年生？」

歩きながら尋ねる私に、彼はなにも答えない。

答えたくないのなら仕方ない。

「じゃあ名前は？」

「名前？」

「うん。道案内してあげるんだし、名前くらい教えてくれないでしよう？」

街灯が少なく暗い住宅街を歩きながら横を見ると、男の子は首をひねってから、

「リュウ、つてみんなは呼ぶ」

と、そつげなく答えた。

「リュウくん？」

「リュウくんじゃなくて、リュウ。そう呼べばいい」

繰り返すリュウはそれ以上言いたくないのか、大人みたいに両腕を組んで足を進める。

言葉遣いがやたらエラそうだし、古めかしい口調のおじいちゃんと一緒に住んでいるのかな？

もしくはお金持ちのお坊ちやまとか。

「リュウはどここの学校に通っているの？」

曲がり角でスマホを取り出し、矢印を確認しながら尋ねる私を、リュウはチラッと見てから呆

れた表情を浮かべた。

「質問ばっかだな」

「あ……なんかごめん」

シユンとする私に、

「謝ることはないさ」

リュウは怒った様子もなかったのでホツとした。

「そんなことより、まだ？」

「あ、もうすぐなんだけど……あれ？」

もう一度スマホを取り出す。地図が指しているゴールの家は、よく知る家だった。

そんなはずないよね、と思いながら表札を見るとやっぱりそこは、紗枝の家だった。

「リュウ……あのね、一応ここみたいなんだけど」

『鈴木』と書いてある木でできた表札を指でさすと、

「あ、ここだ。匂いがする」

うれしそうな声をあげたから目を丸くした。

「匂いってなんの？」

「別に」

「リュウは紗枝の姉弟ってこと？ あれ、弟なんていたっけ？」

たしか紗枝はひとりっ子だったような……。

混乱こんらんしている私わたしに、リュウは門もんのところで振り返かえった。

「もう帰かえれば？」

「え？」

「今いまから忙いそしくなるからさ」

「ちよつと、なによそれ」

さすがの私わたしもこれには思おもわず声こゑを荒あらげてしまった。

ここまで案内あんないさせておいて、その態度たいどはないんじゃない？ いくら紗枝さえの弟おとうとだからって、こ

こはしつかり注意ちゆういしないと。

私わたしの怒いかりをよそに、さつきと玄関げんかんに進すすんだリュウが言う。

「じゃあね、おばさん」

「あのねえ」

と、一歩いっ近ちかづこうとしたとき、私わたしの耳みみに救急車きゅうきゅうしゃのサイレンが聞きこえた。

振り返かえると、遠とくで聞きこえていたサイレンがどんどん大おおきくなっているみたい。

いや、確かく実じつに近ちかづいてきている。

「ちよつとリュウ……あ、あれ？」



と前を向いた私が見たのは、茶色のドア。

玄関の前に今までいたはずのリユウの姿はもうどこにもなかったのだ。

代わりに彼が立っていた場所に、紙切れが落ちていたのが見えた。スーツのポケットに入れていたやつが落ちたのかもしれない。

地面に穴が空いたように思えるほど黒い紙が、玄関のライトに照らされている。

拾いあげて、三つ折りになっている紙を開くと、

「なにこれ……」

黒い用紙いっぱいに白い文字でなにか書いてある。枠線で区切られている表のようなそこに書かれているのは、見たことのない外国の文字だった。

困ったな……。

門の外まで戻ると同時に、角を曲がって救急車が走ってくるのが見えた。ライトが回転しながらあたりを赤く染め



ている。

道の端に寄ると、サイレンがふいに消えた。ハザードランプをつけて私の横に救急車が停まったのだ。

「君、ここの家の人？」

あわただしく降り立った救急隊員に言われて、

「あ、違います」

首を横に振ると、彼は門の横にあるインターフォンを押した。

「鈴木さん、救急です」

『お願いします！ おじいちゃんが……早く、早くっ』

インターフォン越しの割れた声は、ひどく焦っているように聞こえる。

紗枝のお母さんの声みたいだけれど……。

ただごとでない様子に担架を持った救急隊員たちが急いでなかに入っていく。

急な出来事になにがなんだかわからない。気づけば赤いライトに照らされてぽつんと立ちつくしている私。

近所の人も数人、外に出てきている。紗枝のおじいちゃん、大丈夫なのかな……。気になりな

がらも私は、もときた道を早足で戻っていた。

右手に握りしめた黒い紙。

明日、紗枝に事情を説明して、あの生意気なりユウに渡してもらえばいいか。紗枝のおじいちゃんが無事でありますように。

そう願いなながら急ぐ帰り道は、なんだか心細かった。

『友情は、愛情よりも深く強い』

これは、坂口和哉が昔から私によく言っているセリフだ。

坂口和哉とは、小学一年生から中学二年生の今日まで、いつも同じクラス。

だから、私にとって和哉は、気心の知れたクラスメイトであり親友だ。

中学生になつてからは、クラスメイトに『仲良すぎじゃない？』とからかわれることも多くなつたけれど、そんなとき和哉は大きな口でニツと笑つて言う。

『友情は、愛情よりも深く強い』と。

あまりに自信満々に言うものだから、私もそのたびにうなずいてみせる。別にイヤな気持ちにもならないし、たしかに男女の仲を越えた関係だとも思っている。

気心の知れた男友達の存在は、とても心地よかつた。

昔はチビだったくせに、中学校でサッカー部に入ってから急に身長が伸びた和哉は、最近では女子に人気らしい。

たしかにサラサラの髪に秋になっても健康的に焼けた肌、笑うと八重歯が顔を出すというチャームポイントが揃ってはモテてもおかしくない。

おかげで私も、サッカー部のマネージャーの一年の子たちから『坂口先輩とつき合っているんですか?』と疑いの目を向けられることも多くなった。

そう言われても私にとって和哉は、昔から和哉のまま。それ以上でもそれ以下でもないんだよね。

『ただの友達だよ』と答える私に、じとーっと湿った目を残して去っていく後輩たちを何人見たことか……。

今日も、ホームルームが終わったとたん和哉は真っ先に私のもとへくる。  
当然のようにドカツと私の机に腰をおろすと、

「紗枝が休むなんて珍しいよな」と聞いてきた。

そう、紗枝は今日学校にこなかった。

「だね。風邪かなあ？」

昨日の救急車の赤いライトが思い出されたけれど、口には出さなかった。

「ふうん」

肩をコキコキ鳴らした和哉が大きなあくびをひとつ。

「紗枝の決まり文句がないと物足りないよな」

「決まり文句？」

不思議そうな顔をしていたのだろう、和哉が目を丸くした。

「お前、気づいてないのかよ。紗枝と言えば

『私の統計によると』だろ？」

「たしかによく言ってるね。意識したことなかったわ」



クラス委員を務めるほど真面目な紗枝は、なにかにつけて統計学を持ち出してくることが多かった。

メガネを人差し指で持ち上げながら口にしてる紗枝が思い浮かんだ。

「よく観察してるね」

素直に感心する私に、和哉は呆れた顔をしている。

「苗乃がぼーつとしてるからだろ。そういうところ、昔からちつとも変わってないな」

「うるさいなあ。ぼーつとなんてしてないもん」

あはは、と軽い笑い声をあげた和哉が「あ」と思い出したように私を見た。

「たまにはサッカー部の練習も見にこいよな」

「冗談でしょ。なんで私が見にいかなくちゃいけないのよ。和哉のファンにどんな目で見られる

か想像つくもん」

ゾツとしながら断る私に和哉は首を横にひねって、

「苗乃が気にすることでもないだろ」

なんて平然としている。

「気にするよ。レギュラーになったんだから、もう少し自覚しなさいよ」

二年生にねんせいになってすぐにサッカー部のレギュラー入りした和哉かずやは、これまで以上いじょうに部活三昧ぶかつさんまいの日々ひびを送おくっている。

一方いっぽう、私はあいかかわらず文芸部の幽霊部員ゆうれいぶいん。やりたいことがあり、結果けつこを残のこせている和哉かずやがうらやましくもある。

けれど今日の和哉かずやはなんだか元気がないように見える。

「あれ？ なんだか顔色悪くない？ 大丈夫？」

「最近さいきん疲つかれてるのか体調悪たいちよくわるいんだよな。やたらだるくて眠ねむい」

またあくびを宙ちゆうに逃にがした和哉かずやは、ひよいと机つくえからおりて私わたしに敬礼けいれいをした。

「では、部活ぶかつに行いってまいります」

「うむ。がんばりたまえ」

カバンを手に教室きょうしつを出でていく和哉かずやを見送みおくってから私はトイレへ。

個室こしつに入はいると、スマホを取とり出した。学校がっこうでのスマホ使用しゅうようは禁止きんしだけど、紗枝さえが心配しんぱいだったか

ら。

朝あさにメッセージアプリで送おくった、

『おはよう。今日は休みやすみ？ どうかした？』

というメッセージは、昼休みにチェックしたときには「既読」になっていなかった。画面をチエックすると、既読がついていて紗枝からの返信があった。

『ごめんね。源じいちゃんが亡くなってバタバタでさ。今日がお通夜で明日がお葬式になっちゃった』

やつぱり……。

薄暗い個室の天井を見上げた。昨夜の救急車は、紗枝のおじいちゃんのためだったんだ。私も、源じいちゃんとは紗枝の家で何度か会ったことがある。シワだらけの顔をくしくしやくしやにしてよく笑う人だった。

あのあと亡くなったなんて……。

『ご病気だったの？』

メッセージを送るとすぐに既読がついた。

『うん、これまで病気したことなかったよ。脳卒中だったみたい。私の統計によると、脳卒中はガンに次いで二番目の死亡率だよ』

本当は相当落ちこんでいるだろうに、統計の話を持ち出す紗枝に少しだけ安心した。

でも、この間の保健の授業で、たしか脳卒中は四番目くらいだったような……。そんなことよ



りも、今は紗枝が心配。

『大丈夫？ なにか手伝う？ 今から行くか？』

質問だらけのメッセージに、紗枝は『大丈夫』と元気いっぱい笑っているネコのスタンプで返してきた。

スマホをスカートのポケットにしまおうとしたとき、指先になにかが触れた。

取り出してみると、

「あ、これ……」

リュウが落としていった紙だった。

すっかり忘れてしまっていたけれど、どちらにしても紗枝は休みだから返せない。

「しようがないか」

言い訳のように口にしながら何気なくまた紙を開いてみる。

真っ黒い紙に、見たことのない白文字が羅列していて、映画に出てくる暗号文みたい。

トイレを出て廊下を歩きながら、リュウのことが頭に浮かんだ。

あの子は大丈夫なのか……。

生意気な話しかたがおじいちゃんゆずりだったなら、きつと落ちこんでいるに違いない。また

泣いていないといいけれど。

ブランコに乗って涙を拭っている顔が思い出され、少し切なくなつた。

——天高く、馬肥ゆる秋。

ひとりで帰るいつもの道。

たしかに見あげる空の透明度は高く、どこまでも続きそうな青空が広がっている。

あと一時間もすれば空は夕暮れのオレンジ色に塗り替えられていくのだろう。

紗枝のおじいちゃんがきつと今ごろ空に昇っていつてるのかも、なんてセンチメンタルなことを考えてしまう。

人が死ぬって、どういうことなんだろう。

誰かが亡くなる場面に私はまだ遭遇したことはなく、紗枝がどんな気持ちでいるのか想像もつかない。考えようとすると、イヤな気持ちに胸に広がるように軽く首を振つた。

空に向けてため息を放つと、まだまぶしい光に目を細めた。

「ぼーつとしてるとあぶないぞ」

前方からかけられた声。一瞬、和哉かと思つた。

が、それにしては高い声に違和感を覚え、視線を地上へ戻す。電柱にもたれかかっている少年は、昨夜会ったリュウだった。昨日と同じ黒いスーツ姿のリュウは、スタスタと私の前に歩いてくる。

「苗乃、待ってたぞ」

いや、まずは昨日の道案内のお礼を言うべきでしょ。少々ムツとしながらも、

「こんにちは」

と言った私に、リュウは「ああ」と今日もエラそうな態度。

「私を待っていたの？」

リュウは紗枝の弟かもしれないということをおもいだした私の怒りは、すぐに鎮火した。

「あのさ……。昨日は大変だったね。突然だったもんね」

こういうとき、なんて言っているのか難しい。モジモジしながらお悔やみを口にする私に、リュウは「は？」と意味がわからない様子。

「ほら……おじいさん亡くなつたでしょう？」

「ああ、そのことか」

ようやくわかったのか素直にうなずいている。

「今日はお通夜なんでしょう？ 今から行くの？」

「なんで僕か？」

「なんで、つて……」

どうもこの子とはうまく会話がかみ合わない。

まだ小さいから死とか理解していないのかもしれない……。

「それより苗乃。五丁目十一の五まで連れていってくれ」

「え？」

「リストを落としたりやったんだよ。再発行してもらいたいんだけど、なんか難しくってさ。あと

いくつかの住所は覚えているから、とりあえず苗乃を案内役にすることにした」

平然と言つてのけるリュウに、三秒固まってから答えが出た。

「ひよつとしてリュウは、紗枝の弟じゃないの？」

「誰それ」

「昨日案内した家に住んでる友達。あそこつてリュウの家じゃなかったの？」

「そんなこと、ひと言でも言つたか？」

たしかに言っははいません。

ぜんぶ、私が勝手にそう思っただけ。

だとしたら悲しんでいる様子がないのも納得できる。

「じゃあなんであの家まで案内させたわけ？」

「そんなのどうでもいいから、早く案内してくれよ」

私の質問に答える気がないらしい。

ムカ……。

ふつふつとした怒りがまたお腹のあたりに生まれたのがわかる。それでもなんとか自分を落ち着かせながら、私は尋ねる。

「案内するのはなんのために？」

「うるさいなあ。時間がないんだよ」

落ち着け、私。イライラしちゃいけない。相手はまだ小さい子どもなんだから。

「そこが本当のリユウの家なの？」

「時間がないって言ってるだろ」

落ち着くよ、私。ほら、笑顔を作って。

「でも——」

「おばさん、しつこいって」

「あのねえ！」

気がついたときには大きな声をあげてリュウをまっすぐに人差し指でさしていた。

「はつきり言わせてもらいますけどね。私だってヒマじゃないの。昨日だって散々案内させたくせにお礼のひとつも言わずにいなくなつて、今日は今日でまた道案内を命令するの？ 冗談じゃない。そんな態度なら、私は道案内なんてしないからね！」

けっして、『おばさん』と呼ばれたことに怒つたわけじゃない。あまりにも横柄な態度に、キレてしまったただけだ。

思つたよりも効果はあつたようで、リュウはギョツとした顔のまま私を見ながら二歩あとずさりをした。

その瞳にはあつという間に涙がたまり、キラキラと光っている。

唇をぎゅつとかみしめて、涙がこぼれないように耐えている様子に罪悪感がまた顔を出した。

これじゃあ私がいじめているみたいじゃない。

肩で荒く息をしているリュウは、大人っぽい口調でもまだまだ子ども。ということとは、私が折

れるしかないわけで……。

「……もうわかったよ。案内してあげる。その代わり、おばさんって言うの禁止だから」  
その言葉に、少し弱気な目で私を見つめてくる。

「本当に？」

「理由はよくわからないけれど、行くよ」

安心したような笑顔になったリュウが、

「よし。それじゃあ早く行こう」

と、せつついてくる。

変わり身の早さに呆れながらもスマホを取り

出す私だった。

五丁目は普通っていた小学校のあたり。

なつかしい通学路に、なんだか大人になった気分になる。フェンス越しに見えている校庭も校舎も、なんだか全部が小さく見えるから不思議



議。

「リュウはここに通っているの？」

「違う」

「じゃあどこの小学校なの？」

「ふん」

うすら笑いを浮かべ、質問に答える気のないリュウに再度怒りそうになりながら、なんとか目的の場所まで案内ができた。

昔からある平屋建ての小さな家。ここで間違いなさそう。

「ここだよ」

そう言うのと、満足げにうなずいたりリュウが私を振り返った。

「じゃあな」

「いや、ちよつと待ちなさいよ」

「時間がないんだよ」

地団駄を踏み出しそうなりリュウに、聞きたかったことを尋ねた。

「さつき言ってたリストってなんのこと？」



「なんでそんなこと聞くんのだ？ 苗乃、なにか知ってるのか？」

かぶせるように聞いてきたリュウの言葉にふと、思い出す。もしかしたら、私のポケットに入っているあの紙のことかもしれない。

そう思いながらも、なぜか私は首を横に振っていた。散々バカにされてるから、少し困らせた気持ちもあった。

リュウは、怒った顔で私を見てくる。

「知らないんなら余計な詮索はするなよ」

ああ、この子つて絶対に友達に友だいな、とあわれになる。

人とのコミュニケーションでいちばん大事な『相手を思いやる心』があからさまに欠けているのだから。ここはひとつ、年上らしく注意をするべきかも。

「そういう言葉遣い、やめたほうがいいよ」

「なんで？」

「だって——」

理由を言いかけたそのときだった。

昨日も聞いた音が耳に飛び込んできたのだ。いや、さつきから聞こえていたのだらうけれど

ユウとの会話に集中していて気づかなかつた。

振り向くと、角を曲がってやってくるそれは——救急車。

「え、なんで……」

視線を戻すとまたしてもリュウの姿はそこになかつた。まるで神隠しにでもあつたみたいに見えるのだ。

「リュウ？」

玄関に向かつて尋ねる声も、サイレンの大音量にかき消される。

こんなのおかしい。

救急車だつてたまたまこの道を通るだけで、すぐにいなくなるはず。

願ひもむなしく、この家の前までくるとサイレンを消して救急車は止まつた。

邪魔にならないよう、とつさに家の前から離れる。救急隊員たちは駆け足で家のなかへ。

五分もしないうちに担架に乗せられた人が運ばれてくる。見ると高齢の女性で、真っ青な顔が見えた。

慌ててついてくるのは中年の女性。

「この方のお名前は？」

救急隊員のひとりがメモを取りながら女性に尋ねる。

「ヨシダマチコです。母なんです！」

「わかりました。乗ってください。すぐに出発します」

「はい」

あわただしく救急車に乗りこんだ女性が「お母さん！」と叫んでいるのが聞こえた。

どうしよう……。激しく動揺している自分を奮い立たせて、なんとか歩き出す。

胸の鼓動が速くなっているのがわかる。

こんなのおかしいよ、おかしすぎるよ。

リュウを案内した場所に必ず現れる救急車。二度も同じ出来事が起きるものなの？ これはい

つたいどういふことなの？

追い越していく救急車のサイレンが、夕暮れに響いている。

気持ちが悪く落ち着かないとき、私は『夕焼け公園』に寄ることが多い。

町を一望できるこの公園は、本当の名前は『三丁目公園』というらしい。けれど、夕焼けがきれいに見えることから、昔から『夕焼け公園』と呼ばれている。